

# 娘との生活で取り戻した「いきいきしさ」

川辺尚子

二年前、娘を出産して間もないころ、保育者養成校でお世話になつた先生からのお誘いを受け、母校で教育実習を担当し始めました。経験してきたこと、勉強してきたことを伝えたい一心で引き受けましたが、保育現場から離れて久しい私に教える資格などあるのかと、膨れ上がる不安を抑えながら教壇に立ちました。

初めのころは、乳飲み子を腕に抱え、とにかく実習に關係しそうな本を手当たり次第に読み、娘が寝たすきにパソコンに向かつて何とかレジュメを作り、一週目、二週目……と授業をこなしていました。

いま考えれば、乳児との生活なんて本当にゆつたりしていて、もつと余裕をもつて準備できただろうと思うのですが、「せっかく寝たのに起きられては困る」と、コソコソと背中を丸めて家の中を動き回つていたことが、自分でもおかしく思い出されます。

私がてんやわんやしている傍らで、娘は、人間の生命の不思議を見せつけながら、まさにいきいきと成長を遂げていました。「いきいきしさ」という言葉からすぐに思い浮ぶのは、娘が初めて物とかかわり、自ら遊び始めたと私が思つた出来事です。それは、娘が生後一か月半くらいの時のことでした。

台所で食器を洗い終えて水道の水を止めると、静

まり返った部屋に「カタン」という音が響きました。

動くはずもない赤ん坊が寝ている部屋に、鳴るはずもない音が不自然に聞こえたので振り返ると、もう一度「カタン」と鳴りました。娘をよく見ると、まだ血管の浮き出た細く折れそうな腕を震わせながら手を伸ばし、枕元に置かれたバケツの取っ手に付いているプラスチックの輪を、指で押し上げていました。そして、パッと手を離した瞬間、その輪がバケツの本体に当たり、「カタン」と音が鳴つたのでした。疲れたらしい娘は、その輪をじっと見つ、腕を布団に下ろしました。

それから数日後、娘はまたその輪に手を伸ばし、カタンと音を鳴らしました。今度は確かな意思をもつて、何度も何度も。私は思わず心の中で、「赤ちゃんが遊んだ」とかみしめるようにつぶやきました。娘がその時にもつている力のすべてをその輪に注ぎ、精魂込めて遊んでいる姿を見て、「生きている」

ということを強く感じた出来事でした。

一年ほど経つて、娘が伝い歩きをしだしたころには、「この子は、遊ぶために生きている」と思うほど、いきいきしさを増していました。毎朝、娘を起こし抱っこをして居間に連れてくると、娘は体を前へ前へと動かすように跳ね、「早く降ろして」とせがみます。そして床に降りると、早速座卓につかまつて立ち上がり、座卓の上を一周ぐるりと見渡します。

その目は鋭く、活力に満ちています。彼女の目的は一つ、前日と違うものを見つけることです。それがしまい忘れていた筆入れならば、大歓迎。たとえ広告一枚であっても、手に届く場所まですばやく移動し、握り締めて確認します。

しかし、それが魅力的なものではないとわかると、「あー」と不満そうな声を出すのです。やけになつたように、投げ捨てることも……。そのたびに私の頭の中を「環境設定」という言葉が巡り、「ああ、この子にも私は保育者としての未熟さを指摘されてい

るんだわ……」と思うのでした。反対に、娘が一つ

のものを見て、触って、なめて、クタクタになるまで吟味し、喜びのあまり体を揺らすのを見ると、私も体の中から嬉しさが込み上げ、一緒になつて体を揺らしながら踊りだしました。

娘の声を聞き、娘の視線の先を見ていると、ただのタオルでも、ただの靴下でも、ただの空き箱でも、ただの紙切れでも、「ほら、遊んでごらん」と語りかけているように見えてくるのだから不思議です。

娘との生活を振り返りながら、ふと、私は幼稚園を退職してから子どもを産むまでの長い間、子どもが生きた世界から離れてしまつたことに気がつきました。正確にいえば、研究や保育支援で幼稚園には何度も足を運んでいましたから、私自身がいきいきしさを忘れたまま過ごしていたということになります。記憶の中や目の前の子どもたちがいきいきと動き回っていたので、私もその世界にいるものだ

と錯覚していたのかもしれません。

子どもが身近にいない状況では、いきいきしなくとも、生きることができます。私は、幼稚園を退職してから大学に入り、久しぶりの一人暮らしを経験しました。入学当初は、友達もいませんでしたし、大学では受動的に講義を受けていましたから、何日も誰とも口を利かなかつたことがありました。さすがに寂しくなつて、このままではいけないと、友達をつくつたり、ベビーシッターのアルバイトを始めたりしましたが、人とかかわることを求めなければ、かかわらなくとも生きることができてしまうという恐ろしい世界を知つてしましました。そして、その時から徐々に、いきいきしさを失い始めていたのかもしれません。消極的に考え、最小限に動き、最低限の生活を維持しても、それなりに楽しく過ごし、無難に生きることができたのです。

そのころ、旧友の子どもたちと会つて遊ぶことが何度かあり、楽しい時間を過ごしました。しかし、

その夜は決まって、頭や体に疲れを感じました。日ごろ体を動かしていないためだと思つていましたが、いま思えば、私は子どものいきいきしさに体がついていけなくなつていたのでしよう。

大人の世界を無難に生きてきた私は、教壇に立ちながら、学生に何を伝えたらいいのかなどということをしばらくつかめずにいました。具体的な話がいいだろうと、保育の思い出を語りながらも、何かを欠いていると思つっていました。

ある時、ちょっとした雑談で、娘の話をしました。どれだけ子どもは活力に満ちているか、どれほど遊びを求めているのかという話です。学生たちの目が、一瞬で変わりました。それは、おそらく、私の語り方が違つたのだろうと思います。話しながら、頭に血が流れいく感覚がありました。

これまで、何を話すかを考え、ノートに細かく書き、「言い忘れないか」「わかりにくくないか」

「ちゃんと伝わっているのか」ということばかりを気にして、教えることに必死になつてました。ところが、時間が余つてしまつて、思いつきで話した娘のことは、私が日ごろ素直に感じ、考えていることが、そのまま言葉となつて□から出てきたので、私そのものが現れたのかもしません。

いま、改めて倉橋の「いきいきしさ」を読むと、私の暮らしのものに語りかけられているような気がします。「いきいきさなくして子どもの傍にあるは罪悪である」。わが娘にも、そして保育者を目指す学生にも、私のいきいきした感じ方、考え方、欲し方でいなければ、育てる資格などないということです。いつまでも、子どもたちの友でいられるように、いきいきしさをもち続けたいと、そしていきいきしさを失つていないかを、子どもたちの姿から確かめられるような感覚をもつていていたいと思っています。